

# 源泉小学校

長谷川時雨

青空文庫



源泉小学校は、大伝馬町おおでんまの裏にあつて、格子戸がはまった普通の家造りで、上つて玄關、横に二階をもつた座敷と台所。たぶん台所と並んだ玄關の奥へ教場の平屋を建てましたのであろう。玄關の横の八畳には通りにむかつて窓があつた。ここの畳へ座る人種は我々と違つていた。特別の机が配置してあつて、手焙りてあぶりが冬は各自めいめいについている。窓の下のところには、紙だとうに針山もついてあつた。

お午ひる近くなると女中さんや小僧さんがお供ともをして、この八畳間の御門弟ごもんでいたちがやつてくる。お嬢さんたちは、芝居の八百屋お七や油屋あぶらやお染だと思えばまあ間違いはない、御大層なのは友禪ゆうぜんの座ぶとんを抱えさせてくる。お手習だけしているのもあれば、読よみものをしにくるものもある。お針仕事をしにくるものもある。息子さん連もまじつていたようだが、子供心にも、そんな青い、ウジヨウジヨしていた男の子は軽蔑けいべつしたからよく覚えていない。

校長秋山先生は、台所口の一枚の障子のきわに納まつて、屏風びょうぶをたて、机をおき――机の上に孔雀くじやくの羽根が一本突立つていた。火鉢の鑪子かんとすの湯をたぎらせお茶盆をひきよせて、出来上つた人の格好を示してた。山茶花さざんかの咲く冬のはじめごろなど、その室の炭にほの匂

いが漂つて、淡い日が蘭の鉢植にさして、白い障子に翼の弱い蚊がブンブンいつているのを聞きながら、お清書の直しに朱墨の赤丸が先生の手でつけられてゆくを見てると、屏風の絵の寒山拾得とおんなじような息吹をしているように、子供心にも老人の無為の楽境を意識せずに感じていた。

さて教場の方は？　これは区役所の控所とも、授産場とも、葬儀場ともいえる。後には六人一並びぐらいの板張り机になったが、各自寺小屋式の机を持っていたころ、あたしが一年生時は放り出しておく幼稚園といつてよかった。しかし別段庭も空地もないので机場におさまって遊んでいるのだが――まず硯箱からしておもちや箱に転化させて、水入器にお花をさす。硯箱一ぱいに千代紙をしいて、硝子を――ガラス屋がそうはなかつたから、機械の亀の子やその他の玩具の箱の蓋を集めて具合よく敷きこんで、金、銀の丈長や、金銀をあしらった赤や緑の巾広の丈長を、種々の透しを切り込んで屏風をこしらえて、姐さまを飾りはじめる。姐様は、半紙で小さな坊主つくりを作つて、千代紙の着物をきせることもあるが、多くは、絵双紙店で売つているのを切りぬく。自分ひとりではつまらないが、向側も隣席もみんなしてするのだから面白い。さて、このアンポンタンがどんななりをしていたかというところ、黒毛繻子のはやりだした時分なので、加賀紋（赤

や、青や、金の色系で縫った紋）をつけた赤い裏の羽織、黒羅紗フランシャのマントル（赤裏）を着て下駄は鈴のはいつたポツクリだ。

学校と露路を間あいにして、これも元禄年間げんろくに建った表町通りの紙店かみやの荷蔵がある。その裏の何かを取りはらって空地が出来た時、どんなに児童たちはよろこんだかしのれない。向うの方に青い樹きが五、六本、教室の窓の竹格子にむかつて柘榴ざくろの花がまつかだつた。両側が土蔵と土蔵で、突当りが塀よそで他家の庭木がこんもりしていた。

子供たちは鬼ごっこで無中になつたが、なかで一番大童おおわらわなのが校長秋山先生だつた。先生は運動場をもつたことと、子供たちが悦よろこぶのとで欣よろこびが二倍であつたと見える。お附つ合きあいで困つたのが通いの先生だつた。この通いの先生は——初め来たのは若い人で、この商業町に、というよりその頃はまだ法律家などは珍めづらしかつたものと見えて、私がそういう家の子だと知ると、特別にあつかいはしなかつたが、少し待ってお出いでといつて、家の角まで送つて来てくれた。何か家のことでも聞いたりのかも知れないが覚えていない。ある日秋山先生が訪ねてきて、父と長く咄はなしていたが、それは私を送つてくれる先生が書生しやせいにしてくれといつたのだとあとで聞いた。

その次に来た先生が、鬼ごっこで恐縮おそくしていた人で、このおとなしい先生を子供たちま

でが、校長と一緒に頑張って気持ちでさいなんだ。土族上りの先生は弱げで、細い鼻のさきが、いつも冷たそうに赤ぼんで、水鼻がうるんでいた。色白の女のように色の白い人で、お能役者のような摺すりあし足で歩いて、小倉こくらの袴はかまを引きずり、さほど年もとっていないのに背中を丸くしていた。よほど困窮こくきゆうしていたと見えて、初めての日の中ちゆうじき、食じきに、竹の皮へ包んできた握飯おにぎりと梅干をつまんで食べたので侮おごつてしまったのだった。千住せんじゆから歩いて来るので、朝早くから出るのに、雨が降ると草鞋わらじを穿はいていた。秋山先生の弟子煩惱は大変なもので、ある折、市の聯合の大運動会が、桜の盛りの上野公園で催された。小さいながら代用学校と認められて参加を許されたのだから、先生は宇頂うちやうてん天なほど悦んで、一層空地の鬼ごっこや旗とりが奨しょう励れいされた。その日は区内の細かい学校が一かたまりになつて、大きな公立小学校に対抗するので、源泉学校と染めた旗も出来上つた。女の子は赤い緒おの草履ぞうり、男の子は白い緒の草履、お弁当はみんな揃そろえてお寿司すしの折詰せりめを学校からあつた。え、お菓子や飲料のみのもののことまで世話人を定きめたところが、あいにくその日は朝から曇つて、八時ごろには地雨じあめになつてしまつた。無論子供たちも落胆して泣いたが、附添いや何かに慰められて帰ろうとした。すると先生は帰つてはいけなさと叫び出した。といつて雨が降りやんだからとて、その日運動会が催もよほうされるはずはないし、もう何処どこの学校でも子

供は帰したからと、誰がいつても先生はきかなかつた。それでも、一人二人と帰ってしまつて、教場はガランとなる、其処そこ此処ここに赤や白の鼻緒の草履の山があつて、おすしをもつていったものも、食べたものもあるので残りすくなになつて、残つた手伝いが跡片附けをはじめても、先生は竹格子の窓に両手で顔をはさんだまま空を見詰めていた。さようならをしにゆくと、急に先生はたまらなくなつたように涙をこぼしだして激しいすすりなきになつた。

また、こんな事もあつた。丁字ちよんまげ鬘いに結つたお侍さむらいと男の子のむきあつてゐる絵の読本の時間だつた。なんでも大変りんしよく吝うな武士で金銭ばかり数えてゐる者で人に嘲あざけられていたが、ある事變が起つて、人を助けなければならぬ時、日頃愛する金銭を、すこしもかえりみなかつたので、前に罵ののしつた者どもも讃ほめたといふところで質問した。割合金銭のことに興味を持つ——店の買物の代価を、客から受取つて錢箱へ入れることや、売上げの勘定に馴なれている子たちも多かつたので、話はよくきいていたが、なぜ褒ほめたかといふ質問には答えが満足でなかつた。先生はジリジリして褒めたくつてたまらないのが褒められないので機嫌がわるくなりかかつていた。先生の底の方に光る眼が私の上にギョロリときたが、暫しばらくたゆたつてから、

「ヤツちゃん。」

と指さした。子供は率直だ、あたしの家ではあまり金銭おかねの顔を見せない、あたしに金銭の貴さを知らせるには無理だった。だからこの場合、あたしはその武士がお金をならべて楽しんでゐるのは、あたしがあねさま姫様を飾るのとおなじ位にしか見えなかった。だから皆が考えかねているのが不思議でかえって自分の考えが間違つてるのかも知れないとさえおそれた。それでも言った、

「ふだんはお金が好きだが、人を助けるためには……」

そこだ！ と先生は飛上つて卓つくえを打った。堪えかねるほど待兼ねた答を、予期しないアポンタンから得たので、先生の褒めかたは気狂いじみてたほどだった。

「傑えらい、傑えらい。その武士も傑えらいが、ヤツちゃんも負まけずに傑えらいぞ。小錦関こにしきげきだ、やがて日ひの下開したかいさん山の小錦関だ。」

小錦という力士は後に横綱になったが、まだそうならないうち、新進気鋭で売出しかけてでもいたのであろう。そういつて褒めあげた末に、人間は大将を望んでやつと兵卒位にしか出世をしないものだという事や、恐らく〇〇先生も世が世であれば大名を志望こころざししてお出いでだったであろうがなぞと、呆れ顔あきに佇たたずんでいた、例の助教師の方へ嫌味をふりかけて、

そのくせ人の好い笑顔をむけたりするのだった。

この教室の窓の格子のところへ、夏になるとお弁当をみんなが並べておいた。運動場へは台所口から出るのだった。台所には、みんなが持つてきてある小さい土瓶どびんが、せとものやのように幾段にも釘くぎにかけてずらりと並んでいた。お午ひるになると御新造さんが、番茶を酌くみ入れてくれるのをみんながとりにゆくのだった。

ところがこの二、三日、午飯おひるどき時になると、きつと誰かしらのお弁当が紛失なくなっている。今日も眼玉ひやしの廂とあだなされている、あたしの妹の分がなくなった。

年子としこのようなあたしの妹は、一年ばかり間を置いて学校へ上った。色の白い涼しい眼の子おでこだが出額おでこなので前髪を深くきつてさげていたので、眼玉の廂といわれていた。男の子ならんぞに負けないので憎まれっ子でもあった。

お附きの女中のついてくる、八畳の間の方のお嬢さんは、下駄箱も特別なら、課業も午お前ひるまえぎりでお迎えがくるので、お前もまだ年がゆかないから午おひるまえ前おひるまえだけにしろと祖母にいわれたのにきかないで、お弁当にしてみらったばかりの、初の日に奪とられたのだった。おまつちゃんは糸で編んだ網に入れてある、薄い硝子ガラスの金魚入れから水が洩もって廻るよ

うに、丸い大きな眼に涙を一ぱい溜<sup>ため</sup>て堪<sup>こら</sup>えていた。奪<sup>と</sup>られたお弁当箱は、祖母が根負けして買<sup>か</sup>つてくれた朱塗<sup>しゆぬ</sup>りの三ツ重ねの、小さい丸いので、女中が持つてきて置いていったばかりのだった。中身には御飯の上に煎<sup>いり</sup>鶏<sup>たまご</sup>卵と海苔<sup>のり</sup>をかけて、隠<sup>いんげん</sup>元<sup>まめ</sup>豆のおかず<sup>ず</sup>に、味噌漬<sup>みそ</sup>がはいっている約束になつていたのだ。お弁当の袋をとるのが待遠しくつてならなかつたのだった。となりにならないでいる女の子と、副<sup>お</sup>食<sup>か</sup>物の分<sup>わ</sup>配<sup>け</sup>つこの相談までしてあつたのに——机の上には、新しい小さな箸<sup>はし</sup>箱<sup>ばこ</sup>と茶<sup>ちや</sup>呑<sup>のみ</sup>茶碗<sup>わん</sup>が出ている——

おまつちゃんは露路の方を睨<sup>ね</sup>めて泣きたいのを堪<sup>こら</sup>えていた。大紙屋の白壁蔵の壁には大きな亀裂<sup>ひびあ</sup>があつて、反対の算盤<sup>そろばん</sup>屋の奥蔵は黒壁で、隅の方のこんもりした竹<sup>たけ</sup>が冷<sup>すず</sup>しく吹<sup>ふ</sup>いている。石榴<sup>ざくろ</sup>の花は赤く散<sup>ち</sup>りこぼれている。

女中がお弁当を持つてきた時に、

「御飯<sup>ごはん</sup>が炊<sup>た</sup>きたてですから、悪<sup>わる</sup>くならないように、風通しのよい場<sup>ば</sup>処<sup>じょ</sup>へお置きなさいまし  
—

と念<sup>ねん</sup>をおしていった。それでおまつちゃんは竹の風の吹く、窓の敷居の上へのせておいたのだった。昨日<sup>おととい</sup>奪<sup>と</sup>られた子も、一昨日<sup>おととい</sup>奪<sup>と</sup>られた子も、窓に近いお座<sup>ざ</sup>だった。

あたしは自分のお弁当をおまっちゃんに持って行ってやったが、おまっちゃんは見向きもしないで、窓に石盤せきばんをのせて、色石筆いろせきひつであねさまを絵かいていた。あたしも仕方なしに佇たんでいた。すると、窓に並んだ勝手口の方で、カタンと金属かなものの音がした。あたしも見た。おまっちゃんも見た。

露地の出口を乞食こじきのような老人としよりが出てゆく後姿が見える。その老人のさげてゆくものがカタンカタンと鳴る。

「鍋なべが——鍋が、鍋が。」

おまっちゃんは出来るだけの声をだした。

秋山先生は御飯後の苦いお茶を喫のんで、蘭らんの葉色を眺め入っていた。

老人は溝どぶ板いたをドタドタと駈出かけだした。鍋がガチャンとぶつかった音がした。台所からも御新造さんが怒鳴りだした。生徒たちもワーツと声をあげた。

秋山先生は袴はかまの股立ももだちをとつて飛出した。生徒もみんな加勢に飛出した。表通りからも、裏通りからも、番頭さんや小僧や、権助ごんすけさんまでが火事と間違えて駈けつけてきた。

泥棒はあわてて、向う裏へ逃げこんだが、それでも鍋はさげているので、逃げだした道筋には味噌汁がこぼれていた。老人としよりの泥棒はまごついて外後架そとごうかへ逃込んで、中から戸

を押おさえていた。先生は持つている鞭むちで、戸をはたいて、

「出ぬか、出ぬか。」

と怒鳴おこった。見物の弥次馬やじうまは笑ったが、生徒たちは真面目まじめで先生のいう通りに怒鳴おこった。

そうすると泥棒は体をかくしたまま、戸の上から鍋だけさしだした。先生はその手首をグイとひいたので、味噌汁おつゆを肩から浴びてしまったが、カツとした勢いで引出したので、汚い老人はブルブルふる顫ふるえながら出てきた。

先生は勝誇しょうこつて揚よう々と、片っぽの手に鍋をさげ、片っぽの手で老人の肩をひつつかんで引摺ひきずった。大得意で先生は大通りを人形町の交番へと、老人を引渡しにいった。生徒も弥次馬も後からぞろぞろとつづいた。

おまつちゃんもあたしもその時だけは先生を憎んだ。なにをきかれても答えなかった。

祖母は秋山先生一家を信頼しきつていた。時折訪問まじしたが、孫たちの方へは目もかけずに帰った。台所口から家の使つかいが、お盆へ乗せてふくさをかけたものを持つて来ていたが、厳きびしくしてくれと頼たのんでいる様子だった。

おまつちゃんは強情きやうじやうだった。二人がお灸きゆうを据きえられるとき——私の家では、一日に二度

も三度もお灸の出る時があつた。甚しい時は、お灸を据えられて後泣きをいつまでもして  
 いるからといってはまた据えられた。灸は藁だからと、灸好きの祖母が許すので、かんしや 疝  
 癪くもちの母は、祖母へ対して不服な時も、父へ対して不満なときも、子供の皮膚を焼い  
 た。瘦やせた女の股むもほどもある腕をもっている体格の、腕力の強い母親だった。ドサリと背  
 中へ乗りかけられてしまうと、跳はねかえ返すことなどは出来なかつた。妹は秘蔵つ子だったが、  
 それでも仕置の時だけは別で、強情な彼女は腕を脱ぬいたりして、小伝馬町の骨接ほねつぎの百々  
 瀬ももせへ連れてゆかれた。ある夏の夕方、彼女が麦藁帽むぎわらぼうをかぶつて、黄麻こうまの大がすりの維かたひ  
 子らを着て、浅黄へこおびちりめんの兵児帯へこおびをしめて、片腕しやふブラリとさせて俵夫しやふの松さんに連れら  
 れて百々瀬へ行く姿を、あたしは町の角で、夕霧ゆうもやにうすれてゆくのを見送りながら大声  
 で泣出したくなつたのを覚えている。そんな風なので、お灸の時、あたしは滝にうたれた  
 ように、全身の膏汗あぶらあせにへトへトになつてしまつてゐるが、おまっちゃんは何処どこまでも  
 反撥はんぱつした。お小用だというのが癖で、それで手をゆるめると逃るので、出たければして  
 もよいというと、小さな彼女はもうお灸の熱さも、乗つていられる苦しきも忘れて、出も  
 しないお小用を絞りだそうと一生懸命になり、目的通りにやると、も一層激いきどおしい憤りを母  
 から受けるのであつた。

だから学校でもよく残された。あたしもお相しょうばん伴ばんをさせられる。課業のあるうちは、黒板の下へお線香と茶碗おみづの水をもつてたたされるのだが、彼女は笑いながら水の中へ線香を突込んで火を消した。お残りは、広い教場へ二人だけ残されるのだ。机を積み重ねた上を渡つたりして二人は仲よく遊んだが、臆おくびょう病びょうだったあたしは、夕暮ぢかくなると悲しくなりだした。あたしは別に残つていなくてもよいのだが、どうしても妹を残して帰れないので——そんな時、意地悪く家からはお礼を言いに使いが来たりした。

もうよい頃と見ると、秋山先生が、まずあたしだけを部屋へよんで、お茶をくんでくれて、ぼた餅もちをとつてくれたりする。すると、きつとあたしが泣き出すので、それからおまっちゃんを連れにゆく。おまっちゃんにもおなじようにぼた餅をとつてやる。

暮れかかった町を、二人の幼い姉妹が連れだつて帰ると、後の方から離れて、秋山先生がそつと送つてついてきてくださる——

秋山先生は女の子の仲間にいると女親のようにものをいった。ある春の日、山吹きのしんをぬいて、紅べにで染めて根がけにかけてきた小娘こむすめが交つて、あたしのお座をとりまいた。あたしはいつもの通り石盤へ人間を2の下へりの字をつけたような形に描いて、昨日の続きの出たらめ話をしているときだった。

「金坊、沈丁花の油をつけてきたね。」

と通りがけに先生が言った。金坊とよばれたのは古帳面屋の娘で、清二元をならっている子だった。ニコリと笑った、前髪から沈丁花の花をだして見せた。

この学校の向うに、後日あたしが生花を習いにいった娘の家で、針医さんがあった。もすこしさきへゆくと、塀ぎわに堀井戸があつて、門内に渡り廊下の長い橋のある馬込さんという家があつたが、その女中がお竹大日如来だったのだといつて、大伝馬町の神輿の祭礼の時、この井戸がよく飾りものに用いられたが、ある時は団七九郎兵衛の形を飾り、ある時はその家にちなんだお竹大日如来がお米を磨いでいて、乞食に自分の食をほどこしをしているのだった。

その隣家に清元の太夫とかいう瓢箪の紋の提灯をさげた駄菓子屋があつた。石筆や紙や学校用品を売っていたが、売手のおかみさんが上手なので、近いところよりも、生徒はそこに集まった。おかみさんは学校用品よりも、青竹の筒にはいった砂糖蜜入りのカンテンや、暑くなるとトコロテンの突いたのをお皿に盛って買わせた。おかみさんはよく話した。清元のお師匠さんをしている自分の旦那が、非常に声がかかったので仲間になたまれて、水銀をのまされたので、唄う方が出来なくなつたので、仕方なしに三味線の稽

古いにしへをしているのだと、芸人のかなしみを、子供が感じるようにしみじみというのだった。だから、品物を買っておくれといった。

そのすこしさきの町角に杯口屋ちやくちやのおくんちゃんの家がある。お国ちゃんくんにゃんはあたしとおみきどつくり徳久利のように、長唄のおつきあいせいら浚いにお師匠さんに連れてかれた少女だから、そのうちに書かなければならない。

学校の一軒さきに大きな人力車宿くるまやどがあつて、お勘ちゃんかんという、色は黒いが瘦やせがたなきりりとした、きかない氣の、少女こむすめでも大人のように氣のきいた、あたしのために、あたしの家へよく忘れものや、言伝ことづげを言いにいってくれた娘があつたが、後に吉原で奴太夫やつこたゆうという名でつとめに出ているときかされたことがある。その手前に表通りの砂糖問屋の磨きあげた、黒塗りの窓のある住居蔵があつて、お糸さんという豊かに丸っこい娘さんの琴の音がよく聞えていたが、隣りに、とてもみじめなます乏しい母子おやこ二人の荒物屋があつて、小娘のおとめさんもお婆さん見たいにうつむいて、始終ふるえているように見えた人だった。その斜すじむこ向うに花屋があつた。剥身むきみのように幅の広がった顔と体の妹と姉とがいた。二人がいるうちは花屋の店もよけい賑にぎやかに見えたが、馬喰町ばくろちようの郡代ぐんだいの矢場女やばおんなになつてしまつた。





# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源泉小学校

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>